HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	明治期における学校運動部活動の創成 ： 高等師範学校と嘉納治五郎を中心に
著者	永谷，稔; Nagatani，Minoru
引用	北海学園大学大学院経営学研究科　研究論集(14): 49-56
発行日	2016-03

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

明治期における学校運動部活動の創成

── 高等師範学校と嘉納治五郎を中心に ──

永　谷　　稔

1．はじめに

現在の学校運動部活動は、教員の過重労働、少子化に伴う教員数の減少や教員の高齢化、合同チームによる運営、地域スポーツクラブとの共生など、問題や課題が山積している。教員は、学校における日常業務も多忙化しているにも関わらず、部活動顧問を引き受けることがもはや慣例となっている。中澤（2014，p.100）によると、1947（昭和 22）年では中学校の運動部活動の 4 分の 1 に顧問教員の配置があるのみで外部指導員が 13％を占めていたことに対し、1977（昭和 52）年には顧問教員配置が 94.4％に増加し外部指導者が 3.8％に減少しているとのことである。現在では、ほぼ全教員が部活動に対して何らかの指導に当たることになっており、不慣れな競技の指導をしなければならない顧問教員も少なくなく、指導上においては適材適所の配置とは言い難い。このような場合は、指導される生徒たちが不利益を被る結果となる。こうした現状に対して東京杉並区では、2013（平成 25）年度より指導者派遣委託を一部実施しており、大阪市では 2014（平成 26）年に自治体単位で部活動委託の段階的導入を検討している。また、地域スポーツクラブとの共生については、谷口（2014，p.16）が部活動と総合型地域スポーツクラブの共生について、その失敗事例から見えてきた教員文化について批判的に考察を加えており、学校運動部活動との共生が進まない諸相を明らかにしている。

文部科学省による 2008（平成 20）年体育･スポーツ施設現況調査によると、日本の体育施設の 61.2％は小学校・中学校・高等学校に設置されているグラウンドや体育館などである。欧州の学校ではグラウンドや体育館の整備率が低い。欧州では一般的に学校ではなく地域のスポーツクラブでスポーツをしている。したがって、日本では学校中心に体育やスポーツを推進しようとしてきた結果であることが理解できる。中学校体育連盟や高等学校体育連盟への登録生徒数（部活動に所属する生徒数）もやや減少傾向にあるものの、文部科学省による学校基本調査の中学生および高校生数推移と比較すると、少子化の影響がありながらも維持していると言える。加えて、学校運動部活動は正課外活動でありながら、多くの教員が教育の一環として指導にあたっており、近年では学校以外でのクラブチーム等に参加するケースも増える中、やはり学校運動部活動は欠かせない存在といえるのではないだろうか。保護者の立場からも、学校に通いながら場所を移動することなく教員が指導にあたり、会費等が発生せず費用負担感も低いことは、非常に好都合と言える。しかしながら、行き過ぎた勝利至上主義であったり、体罰やしごき、セクハラであったり、数多く問題が取り沙汰されていながらも、一向に根絶しない現状も憂慮しなければならない。

このような学校運動部活動は、日本においてどのように成立し、制度化されてきたのかというと、帝国大学（現在の東京大学）で設立されたとされている。当時の帝国大学では、学生の自発的なスポーツ活動が奨励されており、帝国大学が創立された直後の 1883（明治 16）年に、御殿下運動場で学生陸上運動会が実施され、翌年には隅田川で水上運動会として漕艇大会が実施されていた。現在でいう陸上競技部と漕艇部が活動していたのである。これらの活動を対抗戦や定期戦といった毎年定期的に開催する機関として「運動会」が帝国大学に設立されている。その後の高等師範学校においての「運動会」設立は、嘉納治五郎が意図して設立したものではあるが、あくまで学生教職員の積極的に鍛錬効果が上がるよう毎日少時間でも運動実施するように奨励している。その後「校友会」として再結成後も学内に倫理学会、地理歴史学会、英語学会、博物学会などの文化系学生団体が生まれるなど、活動は急速な成長を遂げている。

次々に高等教育機関で学校運動部活動（当時は「運動会」や「校友会」活動であるが、便宜上学校運動部活動と表記する）が始まり、高等師範学校においても積極的に学校運動部活動が奨励され、そうした経験や教育を受けた卒業生が全国各地の学校で学校運動活動を推進し普及されていくのである。明治維新後、1875（明治 5 ）年に学制が公布後、学校令が 1886（明治 19）年に公布された。そして、全国各地に学校が飛躍的に設置されていくのと同様に学校運動部活動も盛んになり、対抗戦などが実施されたことが記録として残っている。当時の学校運

動部活動も、現在と同様に学校教育の公的なカリキュラム（いわゆる正課活動）ではないが、学校や地域によってかなり状況が異なっていたものの、ほとんどの学校に設置されていた。

帝国大学から始まって以来、高等教育機関を中心に普及していった学校運動部活動であるが、高等師範学校で始まった当時の校長は嘉納治五郎であった。嘉納治五郎は柔道の創始者、日本スポーツの国際化に貢献した人物として有名であるが、日本の体育の父とも呼ばれ、学校体育に大きく影響を与えている。嘉納治五郎校長は、高等師範学校の全学生教職員に積極的に鍛錬効果が上がるよう毎日少時間でも運動実施するように奨励している。また、一教科のみを教える教育者ではなく、人格形成や人間教育をする教育者養成の必要性を説いており、実践しようとしていた。そのひとつが学校運動部活動の奨励であり、その後文化系も含めた「校友会」が 1901（明治 34）年に結成されるのである。1899（明治 32）第 2 次中学校令において、中学校の急速な設置増加が促され、学校運動部活動を含め、この「校友会」が全国の学校において普及されたのである。嘉納治五郎は高等師範学校校長として全国に輩出する教員養成をする立場にあったため、体育やスポーツの普及においても、先を見据えた、時代に合わせた実践を行っていたことがわかる。現在の学校運動部活動の在り方をより良くしていくためには、現在の社会状況と単純に比較は出来ない。また、当時明治維新後新政府が新しい国のあらゆる制度を構築していこうとする機運であり、変革や改革に積極的である社会状況ではあったものの、その成立や普及過程を検証する必要性は大いにあると言える。

2．明治期旧学校制度における学校運動部活動の設立

明治維新後の教育制度改革においては、各藩独自であったり、地域差や身分等に応じて与えられる内容も異なっていたりした教育を、一般国民にまで広めて全国一律の教育制度が必要であるとして義務教育が開始された。1872（明治 5 ）年の学制公布にはじまり、1879（明治 12）年の教育令、1886（明治 19）年の学校令（帝国大学令、師範学校令、小学校令、中学校令）、により、最終的には第二次世界大戦後の学校教育法制定に至るまで続いている。現在の新学校制度とは種別や表記、年齢区分が異なるものの、概ね現在の中学校や高等学校に相当する学校運動部活動の設立状況やその活動内容について明らかにする。

学校運動部活動の起源としては、先述のとおりであるが当時帝国大学では、各部の交流戦や対抗戦、定期戦を開催する組織として、1886（明治 19）年に「運動会」が設立された。「運動会」といっても現在の小学校で行われているようなものではなく、いわゆる現在の大学の体育会的な組織であった。その後、1887（明治 20）年に東京商業学校（現在の一橋大学）、1892（明治 26）年に慶應義塾、1896（明治 29）年に高等師範学校（現在の筑波大学）、1898（明治 31）年に京都帝国大学（現在の京都大学）で次々に「運動会」が設立されるように、高等教育機関においては運動部が盛んに実施されていたことがわかる。その後、中等教育機関へ広まっていくわけであるが、旧制中学校では「運動会」ではなく、多くが「校友会」という名称で設立されている。それは、当時の教員養成を担っていた高等師範学校においては、「運動会」から文化系も含めた様々な課外活動を総称した「校友会」が結成されており、高等師範学校を卒業した教員が全国の中学校で普及させていった結果である。当時の「校友会」は、ほとんどの中学校に設けられ、公的なカリキュラムではない正課外活動である故に、組織形態や内容も一様ではなかったが、学校史などには運動部のいきいきとした様子や対抗戦がしきりに行われている様子などが描かれている。全国主な中学校の「校友会」とその活動内容については以下にまとめておく（表 1 ）。

旧制中学校数については、1886（明治 19）年では、全国でわずか 56 校であったのが、1912（明治 45）年には 300 校を超え（図 1 ）、設置普及が進んでいる様子がうかがえる。高校においては 1887（明治 20）年東京高等商業学校に「運動会」同様の組織が設立されている。当時の高校は、1886（明治 19）年の学校令により設立された第一から第五と山口、鹿児島の全国 7 校設置されている。そのうち、1890（明治 23）年に第一高等中学校で「校友会」が設立された。この後、第一高等中学校に続き、第五高等中学校が 1891（明治 24）年に、さらに第三、第二、第四の順で「校友会」組織が設立された。このように高校においても、1890（明治 20）年代半ば頃までに、全員加入ではないものの、会則等を含む全学的な組織がつくられ、体育系のみでなく、文化系のみであったり、両方を含む形であったり、様々ではあるが確実に活動が展開されていった。

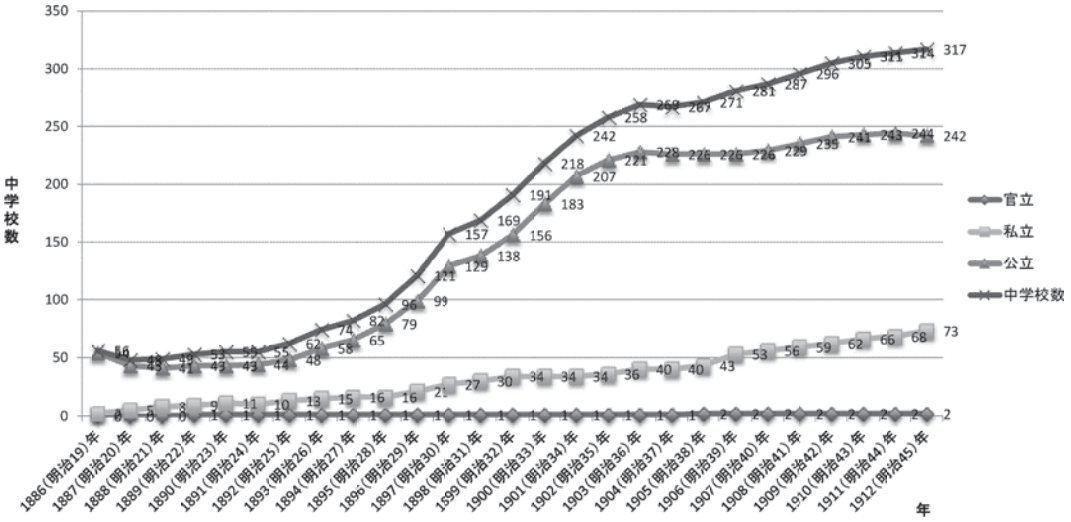
明治初期の旧制中学校における学校運動部活動は、「校友会」のほか「学友会」などと称して活動していたが、意味上の区別はなく、教科外、正課外活動であり、生徒の学校生活を補完する活動として実施されていた。また、画一的、注入的な戦前の学校生活において、生徒の自主活動を認めその運営も生徒中心に進められた唯一の場であったとされている。また、そのほか教育効果として、異年齢集団の学習効果、地域のスポーツの興隆、文化の向上、生徒の生きがい、学校に来る喜びを挙げている。これらの教育効果は、まさに現在の学校運動部活動に通ずるものである。しかしながら、1892（明治 25）年頃か

表 1．明治期における主な旧制中学校「校友会」活動一覧

校友会設立年	名称	学校名	主な活動内容
1886（明治 19）年	尚志会	岡山中学	運動会、演説討論会、端艇 撃剣、柔道、野球、短艇
1886（明治 19）年 1897（明治 30）年	同窓学生会 学友会	松江中学	カッター、ボート競漕 野球、撃剣柔道、雑誌部、講談部
1887（明治 20）年	運動会	岐阜中学	フートボール、ベースボール、撃剣、柔術、端艇
1888（明治 21）年	創立会	松本中学	雑誌の発刊、撃剣、槍術、野球部、テニス
1888（明治 21）年 1898（明治 31）年 1912（明治 45）年	学友会 体育会 校友会	山口中学	運動会 撃剣、柔術、弓術、フートボール、ベースボール、遠足、テニス 弁論部
1889（明治 22）年	校友会	鳥取中学	撃剣、柔道、野球、ローンテニス、ボート、水泳 剣術、蹴球、遠足、兎狩、討論会、文芸部
1889（明治 22）年	校友会 同窓会	高知県立第一中学	相撲、撃剣、ボート 野球
1890（明治 23）年	学友会	東京府立第一中学	文芸、武術、運動、遠足、游永、漕艇 競争科、ローンテニス科 ※校友会設立以前に、AS 会創設、以文会
1890（明治 23）年 1894（明治 27）年 1901（明治 37）年	芹陽校友会 崇廣会 校友会	彦根中学	演説討論部、雑誌部、撃剣柔道部、陸上運動部、水上運動部 野球、庭球、武術部
1891（明治 24）年 1892（明治 25）年 1896（明治 29）年	柔克会 学友会 校友会	静岡中学	野球 雑誌の発行 水泳部、ローンテニス部
1891（明治 24）年 1897（明治 30）年	同窓会 校友会	千葉中学	撃剣部、柔術部、遠足部、野球部、端艇部、陸上運動部、弓術部、雑誌部庭球部
1892（明治 25）年	校友会	大阪府立第一中学	野球、文芸、武術、運動 漕艇、フートボール
1892（明治 25）年	校友会	秋田中学	講演部、雑誌部、体育部（柔術、剣術、運動会） 競漕、野球、脚球、庭球
1892（明治 25）年 1893（明治 26）年	校友会 校友会改正	青森県立第一中学	会誌の発行、演説討論会の開催 運動科設置、柔術、フートボール・ベースボール
1892（明治 25）年 1894（明治 37）年	講談会、演武会 学友会	京都府立第一中学	運動会、演武会、陸上運動会、水泳、漕艇 庭球
1892（明治 25）年 1895（明治 28）年	修猷館館友会 修猷館同窓会	福岡県立中学修猷館	柔道、剣道、陸上運動、野球、庭球 端艇部、水泳部、雑誌部
1892（明治 25）年 1912（大正元）年	同窓会 校友会	安積中学	雑誌発行、ベースボール会、撃剣弓術、茶話会、庭球、柔道、剣道
1893（明治 26）年	学友会	愛知県立第一中学	撃剣、柔術、ローンテニス、ベースボール、端艇部
1893（明治 26）年 明治 20 年代中頃 明治 20 年代後半	校友会 同窓会 交友会	姫路中学	フットボール 野球 テニス
1894（明治 27）年	遊方会	新潟中学	撃剣部、端艇部、ベースボール部
1894（明治 27）年 1894（明治 27）年 1902（明治 35）年	学友会 協研会 学友会改正	前橋中学	野球、ローンテニス、柔術 ※これ以前には雑誌部、運動部、講演部
1894（明治 27）年 1898（明治 31）年	学友会 同窓会	沖縄中学	撃剣、水上運動会、演談、雑誌、陸上運動、野球
1894（明治 27）年 1901（明治 34）年	同窓会 校友会	広島中学	野球会、撃剣、文芸部 短艇、球技、剣道、柔道、雑誌、講話、事務
1894（明治 27）年 1902（明治 35）年	文武会 誠心会	富山中学	柔道、撃剣、ベースボール、フートボール、剣道、短艇部
1885（明治 28）年	學友会	札幌中学校	演説部、遊戯部、雑誌編集部、会計部 遊戯部から武術部（銃剣、柔道、射撃、弓術）独立 遊戯部のひとつとして野球部創設 大弓部、ローンテニス部
1895（明治 28）年	校友会	高松中学	文芸部、武芸部 野球団結成、振武会（撃剣）柔道部、漕艇、水遊、運動、遠足
1896（明治 29）年	共同會	山形中学	雑誌発行、野球部
1896（明治 29）年	望洋会	宮崎中学	運動部、撃剣部 ローンテニス、野球、フートボール 瑞艇、端艇、柔道
1896（明治 29）年 1898（明治 31）年 1900（明治 33）年	運動会 校友会 同志会	徳島中学	野球 雑誌部、漕艇部、撃剣部、競技部、水泳部、柔道部、講話部
1897（明治 30）年	学友会	仙台第一中学	撃剣、柔道、野球、庭球、弁論、雑誌、ボート
1897（明治 30）年	学友会	郡山中学	文芸部門、武術部門（撃剣、柔道、弓術、水泳）、運動部門（野球、庭球）
1897（明治 30）年 1898（明治 31）年	校風会、保会、切磋会 知道会	水戸中学	野球、講話、英語、雑誌、柔術、撃剣、庭球
1898（明治 31）年	校友会	金沢一中	陸上運動会、講談部、運動部（陸上運動、水上運動）、編集部 学芸部、武道部（柔道、剣道、弓道）、会務部 蹴球部、庭球部、遠足部、端艇部、溷水部
1899（明治 32）年 1908（明治 41）年	興風会 校友会	福井中学	野球部、庭球部、弓術部、柔道科
1900（明治 33）年	校友会	神奈川県立第一中学	文芸、武芸、庶務、野球部、剣道部 水球部、庭球部、柔道部
1900（明治 33）年 1900（明治 33）年	清献会、獅子吼団、修養会 校友会	岩手中学	庭球部、雑部蹴鞠部、氷滑部（スキーとスケート） ※校友会発会前に野球が行われていた
1900（明治 33）年 1901（明治 34）年 1903（明治 36）年 1905（明治 38）年	運動会 講文会 校友会	熊本中学	撃剣、体操 フットボール、ベースボール、テニス 国漢、英語、詩吟、軍歌、図書、雑誌 文芸部、武術部、運動部
不明確		第一鹿児島中学	ボート、野球

出典：安東由則（2009）「明治期における中学校校友会の創設と発展の概観」より関係部分のみ抜粋し筆者が設立年順に作成

図 1．明治期の中学校数推移 1886（明治 19）年～1912（明治 45）年



文部省「文部年報」より筆者が作成

ら 1897（明治 30）年以降にかけて、文部省や学校が、学校運動部活動の教育効果を取り込んでいった経緯を渡辺（1997，p.129）は次のように分析している。学校は部活動が進展するにつれてその教育的価値を認識し、適正管理下に統合しようとしたこと、健康の保持増進目的から精神面の鍛錬に重点が移動していったこと、正課授業への専念が損なわれると危惧したことなどを挙げている。このようなことは、まさに今に始まった事ではないことがわかる。当時も熱心に指導するあまり、スパルタ式トレーニングを実施してみたり、正課の授業が疎かになったり、その結果部活動を指導する余力も意欲も無くなったりと、現在と同様の状況があったとのことである。当時の校長たちは、部活動が無秩序に発展することを恐れ、文部省もそのようの現状に対して、部活動は正課活動を補完していく方策が取られたのである。

現在の学校運動部活動は、2012（平成 24）年の学習指導要領の改訂でその位置付けが教育活動の一環として明記はされたが、あくまで正課外活動として実施されている。したがって、生徒の参加は任意であり、あくまで自主性・主体性に基づき実施されるものである。学校運動部活動が、校友会活動として戦前に生徒の自発的な活動として始まったものの、昭和期に入ると、ファシズム体制と軍国主義のもと鍛練主義、競争主義に傾倒し、最終的には軍事教練のために組織されていった。しかし、戦後クラブ活動を始めとする特別活動の分野は転換期を迎えた。1947（昭和 22）年学習指導要領で教科として「自由研究」が位置づけられた。これは、教科の発展としての自由な学習、クラブ組織による活動、当番の仕事や学級委員としての活動の三点が内容として挙げられ、今日の特別活動の原点ともいわれている。その後、1969（昭和 44）年以降必修クラブ活動（正課外部活動ではない）が正課として位置づけられたが、それ以前までは正課外活動である。1989（平成元）年から 1997（平成 9 ）年までは、必修クラブ活動を部活動の参加をもって一部あるいは全部の履修に替えることができる部活動代替措置期間であった。その後、1998（平成 10）年から正課としての必修クラブ活動が廃止され、再び正課外活動と位置付けられた。2012（平成 24）年の改訂では、部活動の意義や留意点について「スポーツや分野および科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」と規定された。戦後新制中学・高校における部活動の位置付けについては以下に示すものである（表 2）。しかしながら、既知のとおり正課である国語・算数・理科・英語といった時間割で割り当てられた授業科目ではなく、放課後に行うホームルーム・生徒会活動と同等の活動である。したがって、位置付けとして学習指導要領に教育活動として明記はされたものの、正課か正課外というと未だグレーの状況であるが、「運動会」として設立され「校友会」へと変遷し

表 2．戦後新制中学・高校における部活動の位置付け

学習指導要領改訂年 実施年は四年後	1947 昭和 22 年	1951 昭和 26 年	1958 昭和 33 年	1969 昭和 44 年	1977 昭和 52 年	1989 平成元年	1988 平成 10 年	2012 平成 24 年
正課活動	特別課程活動 （クラブの時間）	特別教育活動 クラブ活動	特別教育活動 （クラブ活動）	必修クラブ活動	クラブ活動	（必修クラブ活動） 部活動		
正課外活動	部活動	部活動	部活動	部活動	部活動 （必修クラブ活動）		部活動	部活動

た学校運動部活動への参加意思については、当時も現在も変化していないことになる。

3．明治期の教育および嘉納治五郎の学校運動部活動普及方策

明治維新後、初代文部大臣として教育行政に携わったのは森有礼である。森は 1847（弘化 4 ）年に薩摩藩士として生まれ、1865（慶応元）年から 1868（明治元）年までイギリス、次いでアメリカに留学している。明治維新後 1870（明治 3 ）年から 1872（明治 5 ）年の間はアメリカ代理公使として 2 年半をアメリカで過ごし、1873（明治 6 ）年 3 月にアメリカより帰国した後、日本初の学術団体である明六社を結成し、日本の言論界を構築している。その後 1879（明治 12）から 1884（明治 17）年の間は、英国公使としてイギリスへ赴き、1885（明治 18）年に帰国し、伊藤博文内閣総理大臣の下、初代文部大臣となった。彼自身人生の 4 分の 1 を欧米諸国で過ごしてきたこともあり、文部大臣として日本の教育行政の基本に欧米教育学説が影響を受けていたことは想像に難くない。特にハーバード・スペンサーの教育論は当時広く知られていたことから、大きな影響を受けており、現在日本の教育にもつながる知育・徳育・体育の基礎となっている。ハーバード・スペンサーは、イギリスの哲学者、社会学者、倫理学者であるが、森が米国公使時代にスペンサーの思想を研究していたこともあり、帰国途中にイギリスに立ち寄りスペンサーに会ったとされている。そして、スペンサーは日本の「軍事型社会」に憲政政治を取り入れることは困難として、森には「保守的な助言」を与えている（長谷川 1995，p.38）。しかしながら、森は教育改革として、高等師範学校を教育の総本山として最も力を入れた。従来の師範教育を一変し近代化させている。当時は国家主義的であり、組織的に充実させたとはいえ、極端な軍隊式寄宿舎生活を強いたことによる師範学校騒動も頻発している（長谷川 2002，p.22）。そして、こうした森の高等師範学校の改革に対しては、野口（1981，p.366）は、自らの高等師範学校での経験から、師範教育が専ら強圧的に行われ、強権に屈服する方法をとった結果、全てが画一的に流れ、何らその間に個性の展開を許さないもの（後略）になってしまったと記述している。森は日本の教育に対して知育・徳育・体育のバランスのとれた教育を実践しようと考えたわけだが、組織的な国家教育や軍隊的な師範教育は、教育よりも国家を優先させていたかのように批判され、誤解されることも多かった。

その後、1893（明治 26）年より、第三代高等師範学校校長に就任した嘉納治五郎は、これまでの高等師範学校教育の在り方に疑問を感じ、さらなる変革に取り組んでいる。森の教育行政に対しては思想や着眼点は良いものの、教育には精通していないにも関わらず実践した結果が効果を上げることにつながらなかったと批判している（大滝 1972, p.248）。軍隊式の教育は形ばかりで魂が入らないとも評している（大滝 1972，p.249）。そこで、寄宿舎管理制度を全面的に改め、生徒に自由闊達な気風をもたらし、余暇時間に運動を勧め、これらを全校教職員生徒に課外活動として奨励し、それらをまとめる組織としての「運動会」を設立したのである。当初は、柔道部、撃剣銃槍部、弓枝部、器械体操および相撲部、ローンテニス部、フートボール部、ベースボール部の 7 部が存在し、生徒はその一部または数部に所属し、毎日 30 分以上必ず運動を実施することになっていた（寳學他 1998，p. 12）。生徒側から自然発生的に誕生した正課外運動部活動とは幾分性格は異なるが、嘉納校長が意図したように実施され、発展している。そして、「運動会」所属でありながら、英語演説や文章朗読、朗吟説教などの現在でいう文化系の活動も実施されていた。その後 1901（明治 34）年に「運動会」は運動系も文化系も含めた「校友会」として再結成するのである。嘉納校長の考えた運動遊戯（体育やスポーツ）の価値については、1910（明治 43）年にまとめられた「青年修養訓」で述べられ、身体そのものの機能を発達させられるとともに、それを生涯継続していくことの重要性や、正義、公正、精神、道徳を向上させることができると考えていた。したがって、高等師範学校の教育に運動遊戯を積極的に取り入れ、これらを実践する機会として「運動会」や「校友会」活動を設立したのである。嘉納治五郎の主な事項と功績については（表 3 ）にまとめる。こうした高等師範学校の卒業生らによって、学校が急増しスポーツも急速に発展していく時代背景の中、高等師範学校の「校友会」に所属している運動部活動の数が急増している。さらに、中学校の生徒のための全国大会を開催したり、講習会を開いたり、地方スポーツの高度化にも大きな役割を果たしている（寳學他 1998, p.19）。我が国において体育やスポーツの黎明期において、スポーツの普及や発展に貢献したことは間違いなく、嘉納校長の学校運動部活動普及方策は類まれなる結果を出している。

4．ま　と　め

本研究では、明治期における学校運動部活動の創成について、当時の教育や学校数の拡大、高等師範学校校長嘉納治五郎の実践から検証してきた。その結果、明治期の学校運動部活動は、中学校数の拡大とともに、嘉納治五郎の「校友会」設立や高等師範学校卒業生による貢献により普及していったことが明らかとなった。

嘉納治五郎は、柔道で有名であるが、自身の虚弱な体

表 3．嘉納治五郎の主な功績と情勢（明治期から大正初めまで）

年	嘉納治五郎の事項・功績	世の中の情勢
1868(明治 元)年		明治維新
1872(明治 5)年		学制公布
1881(明治 14)年	東京大学卒業	
1882(明治 15)年	学習院の講師就任 永昌寺に私塾開く 嘉納塾、弘文館、講道館の開設	
1883(明治 16)年		帝国大学で陸上運動会、漕艇大会の実施
1885(明治 18)年	講道館柔道が警視庁武術大会に招聘	内閣制度の発足 伊藤博文粗大内閣総理大臣就任 森有礼が初代文部大臣就任
1886(明治 19)年		帝国大学で初の「運動会」設立 学校令公布
1889(明治 22)年		大日本帝国憲法公布 森有礼暗殺
1890(明治 23)年		第一高等中学校で「校友会」設立 第一高等学校の野球部が横浜外人チームを破る
1891(明治 24)年	学習院教授 文部省参事官任命 第五高等中学校校長兼務	
1893(明治 26)年	第 1 期高等師範学校校長 ～1897 年まで	
1894(明治 27)年		日清戦争 ～1895 年まで
1896(明治 29)年	高等師範学校に「運動会」設立	
1897(明治 30)年	第 2 期高等師範学校校長 ～1898 年まで	
1898(明治 33)年	文部省普通学務局長	
1901(明治 34)年	第 3 期高等師範学校校長 ～1920 年まで 「運動会」から「校友会」として体育系･文化系の課外活動を奨励	
1904(明治 37)年		日露戦争 ～1905 年まで
1909(明治 42)年	日本人初国際オリンピック委員会委員	
1910(明治 43)年	「青年修養訓」刊行	
1911(明治 44)年	大日本体育協会創立初代会長	柔道が学校の正科となる
1912(大正 元)年	第 5 回ストックホルムオリンピック選手団団長として参加	第 5 回ストックホルムオリンピックに日本から金栗四三(東京高等師範学校)と三島弥彦(東京大学)の 2 選手が初参加
1914(大正 3)年		第 1 次世界大戦開戦 ～1918 年まで
1920(大正 9)年	東京高等師範学校校長退任	

出典：日本体育協会監修、菊幸一編著(2014)「現代スポーツは嘉納治五郎から何を学ぶのか」ミネルヴァ書房
出典：生誕 150 周年記念出版委員会編(2011)「気概と行動の教育者嘉納治五郎」筑波大学出版
出典：東憲一(1995)「学校教育における嘉納治五郎」、(1992)「嘉納治五郎研究の動向と課題」東京外国語大学論集
出典：大滝忠雄編(1972)「嘉納治五郎　私の生涯と柔道」新人物往来社　これらを参考に筆者が作成

質を改善しようと柔術を学びたいと考え、柳生心眼流や天神真楊流に入門後、起倒流を経て独自の理論を体系化させた柔道を確立し、講道館を設立している。この柔道の成立や普及過程においても、その先見性が如何なく発揮されている。柔道を普及させるためには、従来の柔術を超えなければならないと考え、警視庁の武術大会において、講道館の弟子たちを出場させ、当時日本一であった柔術に大勝利を収め、こうした実績により警視庁から依頼を受け柔道が全国に普及していくようになったのである。そのほか、彼は若くして柔道の講道館設立の他、生活全般から勉学までを教育する嘉納塾、留学生の教育機関としての宏文学院、さらに、弘文館という学校を創設しグローバルな時代を見据えて英語教育を進めている。初めて教鞭を執ることとなった学習院講師時代から初外遊を行い、帰国後は熊本での第五高等中学校初校長に就任するなど、単に優秀な人物というだけでなく、教育力の高さはもちろんのこと、それらを実践・普及させていく能力が非常に長けていたといえる。

また、嘉納治五郎は、東京大学を卒業後、学習院の講師から教頭を経、文部省参事官を命ぜられるが、同時に第五高等中学校校長として赴任し、その後再び文部省に呼び戻され、その後、高等師範学校校長を命じられ、二度非職しながらも三度校長に就任している。実に多彩な遍歴を辿っているわけであるが、学習院時代は上司との確執や校長時代は文部次官との衝突など血気盛んな一面が垣間見られる。しかし、嘉納は英語をはじめとして、理財学、政治学、道義学、審美学を大学で学び、漢字、独語、数学など幅広い知識を学んでいる。当時東京大学の卒業生といえば、非常にエリートであり、貴重な存在であったことは間違いないが、それ以上に彼の思想や信念の強さ、行動力や実践力が高く評価されている。第五高等中学校校長時代は、熊本という地方に赴任しながら、九州に大学を設置する意見書を出し、その後九州帝国大学の設置につながっていくなど、短い在任期間のなかでも大きな功績を残している。こうした影響力は、嘉納治五郎が没するまで変わることなかった。それは、日本におけるスポーツの国際化に貢献し、日本人初の国際オリンピック委員となったこと、日本体育協会の前身となる大日本体育協会を創設し初代会長を務めたこと、幻に終わったものの、第12回東京オリンピック開催招致に成功したことをみても明らかである。

全国の体育やスポーツ活動の普及の大きく貢献した嘉納治五郎であるが、高等師範学校卒業生の指導は、陸上競技や水泳などでは全国トップレベルの競技力を持つほどであり、オリンピック出場や極東選手権大会に出場する選手を輩出し続けている。マラソンのオリンピック選手として出場した金栗四三は、高等師範学校在学中当時の世界記録を27分も縮めるなど驚異的な成績を収めている。一方では柔道部や剣道部、蹴球部に代表されるように、中学校生徒のための全国大会や講習会を開催し、地方スポーツの高度化にも貢献している。いわゆる高等師範学校の学校運動部活動は、このように大変に盛んであったが、旧制中学校における学校運動部活動も、日本古来の運動ばかりでなく、外来スポーツも盛んであり、最も盛んであったのが野球であり、次いで端艇（ボート）、テニスとなっている。対抗戦や大会も県内外で開催されるようになり、1890（明治23）年一高野球部が横浜外人を破り、その報道やインパクトに象徴されるように、中学校においても野球人気が高まり1913（大正2）年には49校まで増加している（表4）。

現在も中学校や高等学校における学校運動部活動の参加者は、先述のとおり少子化の情勢にありながら、横ばいやもしくはやや減少程度にとどまっている。明治期のような教育改革や学校増設を試みる機運ではなく、むしろ、戦後1947（昭和22）年に公布された教育基本法や学校教育法に伴う新学校制度を60年以上もの長きにわたり踏襲している。学校運動部活動についても、あくまで生徒の自主的活動としながらも、正課外活動としての曖昧な位置付けにあり、表面的あるいは文言的には変わっていない。しかしながら、自明のとおり、教員や生徒の置かれている環境は、明治期とは違い近代化や情報化が加速し、利便性や効率性は向上したものの、学校に求められる教育的価値については、向上しているとは言い難い。学校運動部活動をかつての教育効果が上がる活動として位置付けるには、あまりに環境が変わり過ぎていると言わざるを得ない。嘉納治五郎のような全体を俯瞰しながら、物事を進めていくような人物の登場を期待すべきか、あるいは、そうしたこれまでの経緯や歴史を省みて、学校運動部活動を実施していかなければならない。

表4．年別野球部設立校数

年	設立校数	年	設立校数
1884（明治17）年	1	1902（明治35）年	5
中略		1903（明治36）年	2
1891（明治24）年	1	1904（明治37）年	1
1892（明治25）年	0	1905（明治38）年	2
1893（明治26）年	2	1906（明治39）年	4
1894（明治27）年	0	1907（明治40）年	2
1895（明治28）年	0	1908（明治41）年	0
1896（明治29）年	9	1909（明治42）年	1
1897（明治30）年	3	1910（明治43）年	0
1898（明治31）年	2	1911（明治44）年	0
1899（明治32）年	5	1912（大正元）年	1
1900（明治33）年	4	1913（大正2）年	2
1901（明治34）年	2	合計	49

出典：中村哲也（2009）「近代日本の中高教育と学生野球自治」より

2011（平成23）年、日本では唯一のスポーツに関する法律であったスポーツ振興法が50年ぶりに改正され、スポーツ基本法が制定された。加えて2020年のオリンピックに東京開催が決定し、日本初のスポーツの名が付く省庁であるスポーツ庁が新設された。日本ではこうしたことによるさまざまなスポーツにまつわるムーブメントが巻き起こり、現在は日本の体育やスポーツにとって、大きな転換点にあると言える。したがって、これまで学校を中心に体育やスポーツが普及・振興してきた経緯を踏まえると、今後学校運動部活動は継続すべきである。しかしながら、また教育としての体育や教育活動としての学校運動部活動とはどうあるべきかについては、今一度振り返り、十分理解しておかなければならない。そして、現在の学校運動部活動については、旧態依然ではない新たなマネジメントを展開していく必要性が急速に求められている。

引用・参考文献

阿部生雄，寳學淳郎，中塚義実（1998）東京高等師範学校附属中

学校における課外体育活動の歴史：筑波大学体育科学系紀要，21，109-130.
安東由則（2009）明治期における中学校校友会の創設と発展の概観：武庫川女子大学教育研究所研究レポート 39，31-57.
長谷川精一（1995）森有礼のスペンサー理解：相愛女子短期大学研究論集 42，37-54.
長谷川精一（2002）森有礼における「主体」形成 ──「新生社」体験と師範学校政策との相同性：相愛女子短期大学研究論集 49，21-42.
東憲一（1992）嘉納治五郎研究の動向と課題：東京外国語大学論集 45，129-139.
東憲一（1995）学校教育における嘉納治五郎：東京外国語大学論集 50，1-12.
東憲一（1996）嘉納治五郎と柔道，教育，スポーツのかかわり：東京外国語大学論集 52，199-209.
寳學淳郎，清原泰治，阿部生雄（1998）東京高等師範学校の課外スポーツに関する歴史的研究（Ⅰ）── 明治期を中心として ──：高知学園短期大学紀要 28，9-22.
清原泰治，寳學淳郎，阿部生雄（1998）東京高等師範学校の課外スポーツに関する歴史的研究(Ⅱ) ── 大正期から昭和戦前期を中心として ──：高知学園短期大学紀要 28，23-32.
小林誠(2012)学習指導要領からみる部活動に関する一考察 ── 部活動における教師の役割の歴史的変遷 ──：早稲田大学大学院教育学研究科紀要 19(2)，191-201.
桑原三二（1988）旧制中学校の校友会（学友会）中等教育史研究第三集：三冬社.
文部省（1887～1913）文部省学事年報：第 14～40 年報.
文部科学省（2008）体育・スポーツ施設現況調査.
中村哲也（2009）近代日本の中高等教育と学生野球の自治：一橋大学大学院社会学研究科博士論文.
中澤篤史（2014）運動部活動の戦後と現在 ── なぜスポーツは学校教育と結びつけられるのか ──：青弓社.
日本体育協会監修，菊幸一編著（2014）現代スポーツは嘉納治五郎から何を学ぶのか ── オリンピック・体育・柔道の新たなビジョン ──：ミネルヴァ書房.
二木幸男（2010）中学校の部活動の教育的効果に関する研究：早稲田大学大学院教育学研究科　博士学位審査論文.
野口援太郎（1981）明治十九年以降の師範教育の変遷：国書刊行会.
大熊廣明，阿部生雄，真田久（2005）高等師範学校・東京高等師範学校による学校
大滝忠雄（1972）嘉納治五郎　私の生涯と柔道：人物往来社.
体育の近代化とスポーツの普及に関する研究：筑波大学体育科学系紀要，28，157-173. 坂上康博(2001)にっぽん野球の系譜学：青弓社.
佐野昌行（2009）明治期における教育学の一領域としての体育学と体育管理的要素：日本体育大学紀要 39(1)，35-58.
生誕 150 周年記念出版委員会編（2011）気概と行動の教育者嘉納治五郎：筑波大学出版会.
関朋昭（2014）日本の学校スポーツに関する研究 ── スポーツ経営と勝利至上主義に着目して ──：北海学園大学経営論集 12(2)，25-119.
髙橋義雄（2002）旧制大学・旧制高等教育諸学校のスポーツ活動 ── 名古屋大学の前身校を事例として ──：名古屋大学史紀要 10，1-22.
谷口勇一（2014）部活動と総合型地域スポーツクラブの関係構築動向をめぐる批判的検討：体育学研究 59，2，559-576.
東京都教育委員会（2005）に活動基本問題検討委員会報告書：東京都教育委員会.
渡辺誠三(1997)中等教育における部活動の成立と位置づけ ── 明治 20 年代を中心として ──：小樽女子短期大学研究紀要第 26 号，113-145.